「情報処理学会論文誌：プログラミング」の編集について

プログラミング研究会論文誌編集委員会

情報処理学会では，研究会の活性化を目指して様々な改革を進めている．プログラミング研究会はこの流れを受けて，研究会のあるべき姿について徹底的な討論を行ってきた．その帰結として，研究会独自の論文誌の編集にいち早く踏み切ることを決定した．

研究会論文誌「情報処理学会論文誌：プログラミング」の特徴と意義は大きく 3 つある．第 1 は，従来の「論文」に対して想定されてきた対象分野や査読基準では必ずしもカバーしきれない，多様な成果の公表の場を提供することである．第 2 は，投稿論文の内容を研究会で発表することを義務づけることによって，迅速で的確な査読を実現するとともに，議論の結果の最終稿へのフィードバックを可能にすることである．第 3 は，研究内容の表現に必要であると認められれば，長大な論文も採録可能としている点である．

本論文誌を通じて，日本のプログラミング分野の研究活動を盛り上げていきたい．読者諸氏からの多くの論文投稿を期待する．

1. 対象分野

プログラミングは，コンピュータの誕生と同時に生まれた伝統的な分野であるが，コンピュータがある限り不可欠な技術である．並列分散処理やマルチメディア応用など処理内容が高度になるにつれて，プログラミングの重要性は増すことがあっても減ることはないであろう．

「情報処理学会論文誌：プログラミング」は，プログラミングに関するテーマ全般を専門に扱う論文誌である．具体例として次のようなテーマがあげられる．

- プログラミング言語の設計，処理系の実装
- プログラミングの理論，基本概念
- プログラミング環境，支援システム
- プログラミング方法論，パラダイム

これらを応用したシステムの開発事例も対象に含まれる．また，上記以外でも，プログラミングに関する面白い話題であれば対象となる．

2. 編集方針

本論文誌は，プログラミング研究会における発表と論文誌投稿が密接にリンクされている点に特徴がある．論文誌への投稿者が用意する研究会発表用の資料が，そのまま本論文誌への投稿論文となる．

研究会発表をせずに本論文誌に投稿することはできないが，逆に，本論文誌への投稿をともなわない研究会発表は可能である．そのような発表や，論文が不採録となった発表については，アブストラクトが本論文誌に掲載される．従来のプログラミング研究会の研究報告は廃止し，その代わりとして，研究会登録者には本論文誌が配布される．

本論文誌に掲載する論文は，通常のオリジナル論文と，サーベイ論文の 2 種類とする．どちらの種類であるかは，著者自身の指定によって決まる．論文の記述言語は日本語，英語のいずれかとする．論文の長さに制限は設けない．

3. 査読基準

基本的に，減点法に陥ることを避け，論文の良い点を積極的に評価するという方針を貫く．具体的には，新規性，有効性などの評価項目のうち，どれか 1 つの点で特に優れていると認められれば採録する．体裁のみが整った論文より，若干の不備はあっても技術的な貢献の大きい論文を積極的に受け入れる．

このような観点から，たとえば次にあげるような，従来は論文としてまとめることが難しかった内容について論じた論文もできるだけ受け入れる．

- プログラミング言語の設計論
- システムの開発経験に関する報告
- 斬新なアイディアの提案
- 概念の整理，分類法，尺度の提案
- 複数のシステムその他の比較

4. 投稿から掲載までの流れ

本論文誌への投稿希望者，および研究会での発表希望者は，発表会開催日の約 2 カ月前までに発表申込みをする．具体的な方法は研究会ホームページ `http://www.ipsj.or.jp/sig/pro/` を参照していただきたい．申込みの際には，本論文誌への投稿の有無，オリジナル論文とサーベイ論文の種別指定を明記する．また，アブストラクト（和文の場合は和英両方，和文は 600 字程度）を添付する．

論文投稿を希望した場合は，研究発表会の約 1 カ月前までに，別に定めるスタイル基準に従ったカメラレディ形式で論文を提出する．

毎回の研究発表会の直後，編集委員会が開催され，各論文について 1 名の査読者が決定される．査読報告をもとに，編集委員会は採録，条件付き採録，不採録のいずれかの判定を行い，発表会開催後 3 週間程度で発表者に採否通知を行う．照会の手続きはないが，論文改善のための付帯意見が添付される場合がある．この場合は，3 週間以内に改良版を作成する．

5. 研究発表会

2003 年度の発表会は次のとおり行われた．

6 月 16 〜 17 日 [一般]
8 月 4 日 [SWoPP －並列/分散/協調プログラミング言語と処理系]
10 月 14 〜 15 日 [一般]
1 月 19 〜 20 日 [一般]
3 月 18 〜 19 日 [一般]

6. 編 集 母 体

本論文誌は，下記のプログラミング研究会論文誌編集委員会の責任で編集を行う．各研究発表会ごとに担当編集委員が割り当てられ，投稿論文の査読プロセスを主導する．必要に応じて，副担当編集委員をおいて，編集作業を分担することもできる．副担当編集委員は編集委員会メンバ以外から選任することもある．

プログラミング研究会論文誌編集委員会

委員長	村上昌己	（岡山大学）
委員	岩崎英哉	（電気通信大学）
	小川宏高	（産業技術総合研究所）
	小川瑞史	（北陸先端科学技術大学院大学）
	小野寺民也	（日本アイ・ビー・エム）
	柴山悦哉	（東京工業大学）
	田浦健次朗	（東京大学）
	高木浩光	（産業技術総合研究所）
	高橋和子	（関西学院大学）
	富樫　敦	（宮城大学）
	長谷川立	（東京大学）
	原田康徳	（NTT）
	前田敦司	（筑波大学）
	八杉昌宏	（京都大学）
	結縁祥治	（名古屋大学/科学技術振興機構）
	渡部卓雄	（東京工業大学）

本号の編集にあたって

2003 年度第 5 回研究発表会
担当編集委員　原田康徳
副担当編集委員　脇田　建（東工大）

本号は，2003 年度第 5 回プログラミング研究会（通算第 48 回）からの採録論文 6 件と第 4 回からの採録論文 1 件からなる．2003 年度第 5 回プログラミング研究会は，2004 年 3 月 18 日より 19 日まで東京工業大学（大岡山キャンパス）にて開催された．特にテーマを設けず，幅広く論文を募集した．当日は各々発表 25 分，質疑 20 分として 14 件の発表が行われた．

研究会当日の昼休みや発表終了後に編集委員ならびに編集委員会が出席を依頼したメンバーが集まって編集委員会を複数回にわたって開催した．編集委員会では，その委員会直前またはその前のセッションで発表された各論文について，発表から時間を置くことなく議論を行った．ただし，投稿論文の共著者となっているメンバは，その論文についての議論の間は退席している．委員会では先の節に記した対象分野，編集方針および査読基準に従って，各論文の評価できる点について意見が交され，その場で可能な限り査読者の選定を行うようにした．各査読者は，編集委員会での議論をふまえ査読を行った．

結果として，7 件の論文が採録された．採録論文の掲載に続き（1 件は次号に掲載予定），採録論文以外の発表について各々1 ページの概要を掲載する．掲載順序は，論文，概要それぞれについて当日の発表順に従う．

なお本号に掲載の論文「実行環境の変化に即応する圧縮型ガーベッジコレクション」の第一著者である電気通信大学の寺島元章先生は，2004 年 7 月 11 日に御逝去されました．本号への論文の掲載を先生ご自身にご覧いただけなかったことは，編集委員会一同まことに残念に思います．先生の生前のご功績に敬意を表するとともに，つつしんでご冥福をお祈りします．

最後に 2003 年度の活動についてまとめておく．

2003 年度は，5 回の発表会で 51 件の発表があった．前年から年度の前半に限って発表件数が減少する傾向がみられるが，幸いにして 2003 年度も年度の後半になるにしたがって，前々年以前と同等に発表件数が回復してきている．また発表のうち論文誌へ投稿された論文の中から合計 24 編が採録された．これは前年と同じ件数であり，一定以上の質を持つ発表の件数は，

維持されているといえよう．

発表会では前年まで同様 50 名近い参加者が集まることもあり，発表後の質疑応答も以前と変わることなく大変に活発であった．採録件数および研究会の参加者数などから，研究会の活性度は一定の水準を維持していると考える．これは現行のような方式による研究会の活動が開始から 6 年を経過し，ある程度定着したものと考えてよいであろう．編集委員および研究会運営委員各位の努力と協力に感謝する．

最後に，活発な研究会活動を支えていただいた，発表者，発表会参加者，論文投稿者，査読者の方々へ感謝の意を表したい．大変短い査読期間にもかからわず論文査読の労をとっていただいた方々の氏名を掲げる．

2003 年度査読者

赤間陽二，石川　裕，磯崎秀樹，今泉貴史，
遠藤敏夫，大岩　寛，小川宏高，小川瑞史，
久野　靖，齋藤鐵男，佐々政孝，柴山悦哉，
首藤一幸，高橋孝一，立堀道昭，田中　哲，
近山　隆，千葉　滋，千葉雄司，寺田　実，
中島　浩，中田明夫，中村　宏，前田敦司，
松井祥悟，増原英彦，村上昌己，山田俊行，
脇田　建，渡部卓雄，和田幸一，
Jacques Garrigue